

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例あります。本年の累積報告数は30例で、10歳代が12例、20歳代が8例、30歳代が6例、50歳代が2例、60歳代が1例、70歳代が1例となっており、10歳代～30歳代が86.7%(26例)を占めています。
- 流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.12(46例)で、依然として過去5年平均値を上回っています。年齢階級別では、6歳(9例)、4歳及び5歳(各8例)の順に多く、4歳～6歳が54.3%(25例)を占めています。
- 突発性発しんの定点当たり報告数は0.68(28例)で、本年で最も多くなっています。年齢階級別では、6～11箇月が13例(46.4%)、1歳が11例(39.3%)で、0～5箇月及び2歳が共に2例となっています。

◆ 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.37(15例)と多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 二類:結核 1例(肺結核 1例, 肺外結核 なし, 潜在性結核感染者 なし), (喀痰塗抹陽性 1例)
【1月以降の累積報告数 239例(肺結核 152例, 肺外結核 60例, 潜在性結核感染者 27例), (喀痰塗抹陽性 66例)】
- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 2例【1月以降の累積報告数 30例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.95	121
	② 流行性耳下腺炎	1.12	46
	③ 突発性発しん	0.68	28
	④ 手足口病	0.46	19
	⑤ 水痘	0.41	17
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

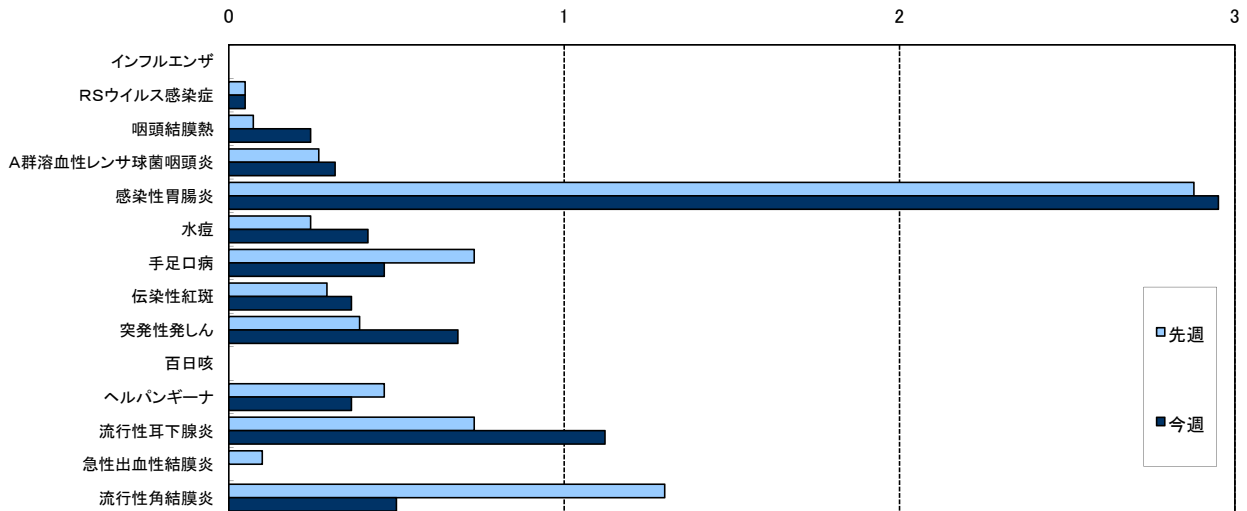
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

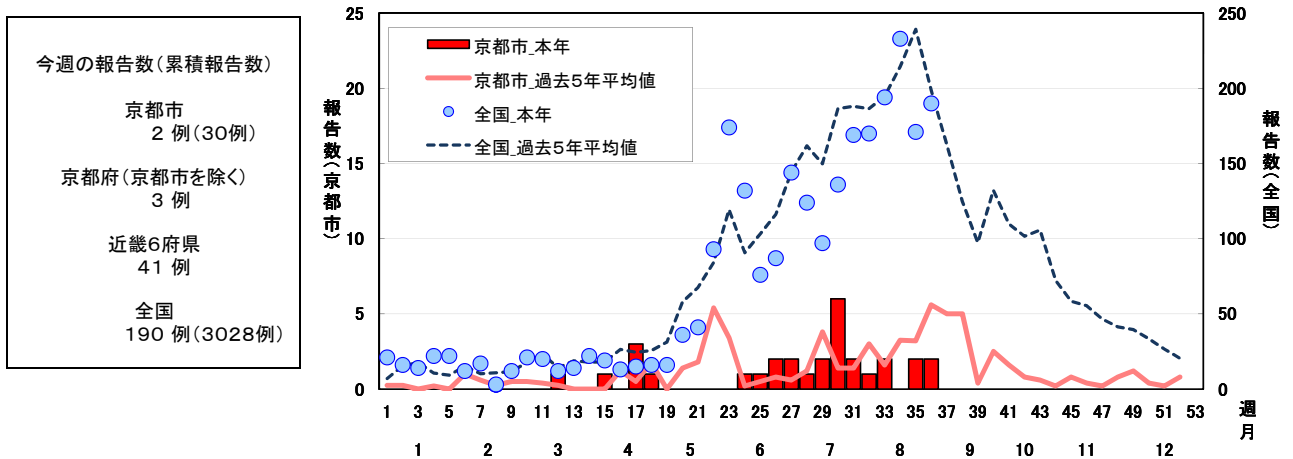
(注)京都市のデータは、平成22年9月16日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第36週)と先週(第35週)の定点当たり報告数の比較

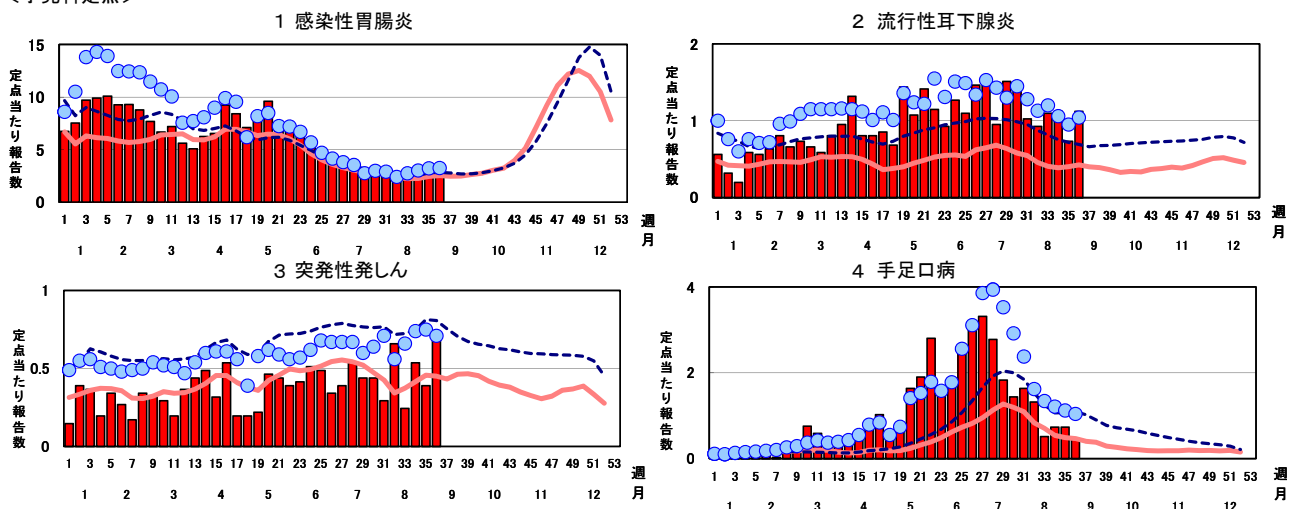


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

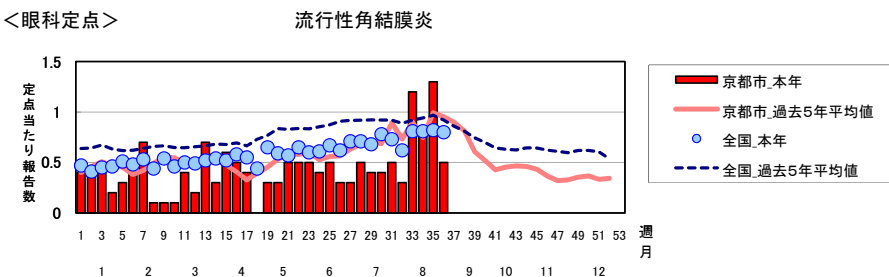


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第36週(9月6日～9月12日)トピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.37(15例)と多くなっています。年齢階級別にみると、3～6歳が60.0%(9例)を占めています。

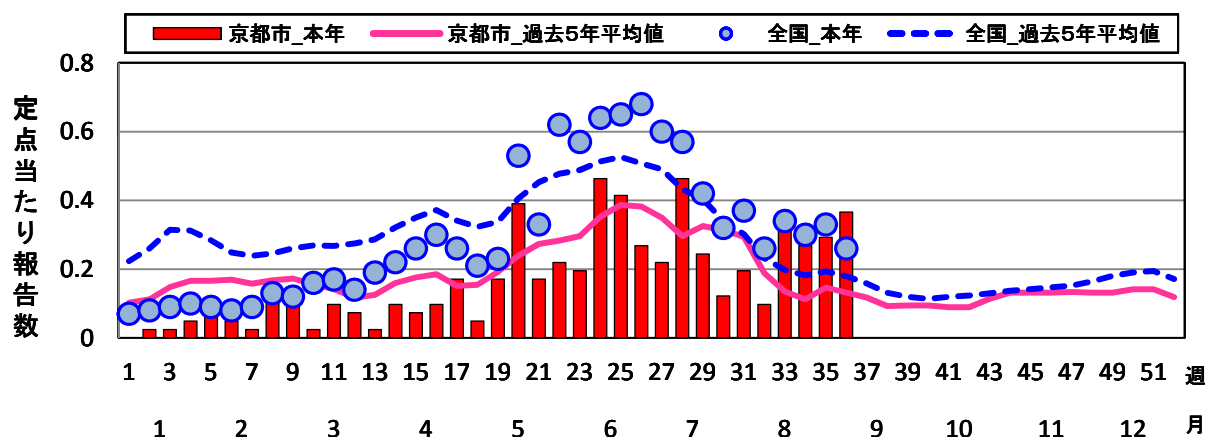
過去10年間(平成12年から平成21年)の定点当たり報告数の推移をみると、数年おきに多くなっています。平成20年以降は、報告数が少ない状態が続いていましたが、第33週(8月16日～22日)以降、4週連続で過去5年平均値を大きく上回っています。今後の発生動向にご注意ください。

また、国立感染症研究所感染症情報センターのホームページに、伝染性紅斑と麻疹の鑑別に関する記事が掲載されておりますので、診断の際の参考になさってください。

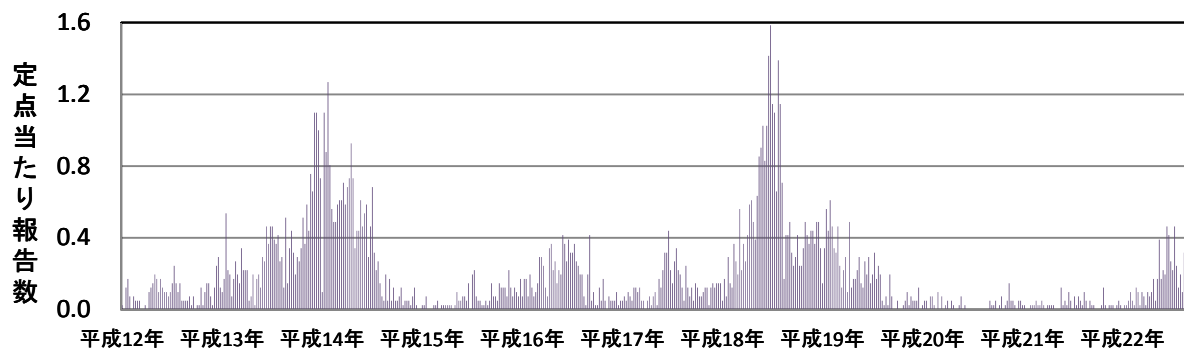
○麻疹と診断された伝染性紅斑の家族例 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3674.html>

○麻疹か伝染性紅斑か診断に迷った症例 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3673.html>

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



平成12年～平成22年第36週の定点当たり報告数の推移



年齢階級別報告数の推移

